



アンドレ・ジイド  
ロジェ・マルタン・デュ・ガール

---

# 往復書簡

2

ジャン・ドレ 編  
中島昭和 訳

みすず書房

## 訳者略歴

1927年埼玉県に生れる。1951年東京大学文学部仏文科卒業。現在 中央大学教授。訳書  
ジイド「蕩児の帰宅・愛の試み」モロワ「現代の教養」パンゴール「原初の情景」ビュトール「段階」。

---

ジイド＝マルタン・デュ・ガール『往復書簡』2

1972年2月10日 第1刷発行

¥ 2500.

訳者	なか	じま	あき	かず
	中	島	昭	和
発行者	東京都文京区本郷3丁目17-15 北野民夫			
印刷者	東京都板橋区板橋4-47-7 山田博			

---

発行所	東京都文京区 本郷3丁目17 郵便番号 113	株式 会社	みすず書房
			電話 814-0131(代) 振替東京 195132

---

© 1972 Misuzu Shobo

三陽社印刷・鈴木製本

ア  
ン  
ド  
レ  
・  
ジ  
イ  
ド  
ロ  
ジ  
エ  
・  
マ  
ル  
タ  
ン  
・  
デ  
ユ  
・  
ガ  
ー  
ル

往  
復  
書  
簡



目次

一九二八年	7
一九二九年	52
一九三〇年	72
一九三一年	118
一九三二年	174
一九三三年	225
補遺	273
『無口な男』(マルタン・デュ・カール作)について	333



一九二八年 — 一九三三年







うわけです。内容には、まあ満足しています。しかし、あなたから忠告が来るならば、どれほど注意をこめてそれに耳を傾げるか、ご存じのとおりです。ご意見があまり遅くならなければまだ間に合います。

あなたの

A・G

いや、ダビのことがあるので私が逃げるのだなどと、どうか思わないでください。あなたの親切な配慮は彼のためになつていたので、それを後悔などしてはいけません。

(一) フランソワ・ポルシェが、グラッセ社から『名乗れざる愛』を刊行したが、これがジイドにシヨックを与え、憤慨させた(マルタン・デュ・ガールの注。補遺、書簡を参照。(原注))

206 マルタン・デュ・ガールよりジイドへ(電報)

大兄の文章、大いに不満あり、あと文。

発信地、ベレーム  
一九二八年一月九日

ロジエ

207 マルタン・デュ・ガールよりジイドへ

親愛なる友

しばらくは迷いました。このフランソワ・ポルシェへの《公開状》について、自分の考えを洗いざらい書き送るべきかどうか、考えたのです。原稿がすでにあなたの手許を離れ、「ヌーヴ・エル・リテール」社で読まれ、解説を付され、そしておそらく転写されてしまつて以上、いまさら何にならう、と。しかし、要するにあなたは私に相談をかけて来られたのですから、私としてはなんの秘密も残しません。またもう一度、あのリトマス試験紙の、受身な役割を果しましょう。リトマス試験紙ですから、助言を与えるなどということはありません。パロメーターにすぎないのです。色の変化を示すだけにとどまります。そこから——その控え目な反応から、よいと思われる方針をきめるのは、あなたの方にお任せします。

さて、このリトマス試験紙はきわめて色濃く染まっています。私はいよいよこの公開状に不満です。はなはだ不満です。これは出来のよいものではありません。構成にも筋にも明快さがありません。生気を欠き、長たらしく、曖昧です。ちぐはぐな二つの音域で楽器が演奏されています(ひとつはダンテの注解という考証学的知識、次に、私的な信仰告白)。この公開状が議論につけ加えるものは、まったくいたしたものではないし、——あなたの偉大さには何ものも加えるも

ベレーム、一九二八年一月九日

のではありません……。すでにポルシェの本が刊行されている現在、「ヌーヴェル・リテレル」紙第二面で意志表明するというのであれば、巧みに「相手の急所を衝く」もの、明晰さと新味とで読者の注意を惹きつけ、また、その高潔さによって人の尊敬をかちうるようなものでなければならなかったでしょう。ところがです、あのままでは、言うべき肝心なことが格別あるわけでもないのに、ジイドは、自分の《症例》について公けに語る機会を逃したくなかったのだ、という印象を与えます……。こういう生彩の乏しい、煮えきらない文章を「ヌーヴェル・リテレル」のような広汎な読者をもつ新聞を舞台に発表することは、とりわけ《不利》でしょう。このような無益な冒険に乗りだす前に、あなたのおそばによく相談相手がいなかったということは、なんととしても残念でなりません。いっしょに、急いで読み直してみましよう。

第一頁、はじめの方——「あなたは悪に反対することによって」悪という言葉にはびっくりします。それが、あなた自身の言葉としてあるからです。せめてこの言葉を括弧のなかに入れてください。第一頁、なかごろ——「私に聞いて言えは」これは礼節にも、謙譲の美德にもふさわしいものではありません。私ならこの八語は抹消するところです。だいいち、これは、次に続く言葉と使用が重なっています。

一頁と二頁は、全文中私の最も愛するところです。あなたこそ、だれにもまして正す資格をもっておられる謬見が、ここいら辺で正

しく訂正されています。それにしても、これらいくつかの私的な弁明のために、これほど広く公けに発言する必要があったのでしょうか。

第二頁の下の方から調子が変わってゆきます。ダンテのことで、見かけ倒しのとほ言わないにしても、長たらしく、いささかくたくだしい原典や解釈の論議にはいつてゆくわけです。正直言って、この議論の面白味を私とてまったく感じないわけではありませんが、それにしてもごくわずかであって、あなたの示しておられる熱意や言葉の豊富さと釣り合いがとれるほどのものではありません。まして、この論議は公開状のなかで中心的な位置を占めているわけですが、その位置と釣り合うものではないように思います。これは、あなた一人のことにダンテをまかかわり合いにさせようがためにのみ書かれたものと人の目に映りかねません。

これから申しあげることが、あるいは神経にさわるかもしれないが、やはり言わせてください。

ダンテが作品のなかに示した男色者たちがろくでなし共でなかったということは、当面の問題にとって真に重大なことでしょうか。また、エスピナス夫人が彼らに修辞学教師としての賛辞を呈したということが。ダンテや——またバルザックという大樹の蔭にあなたの舟を繋ごうとそのように努力することで、あなたは、自己正当化の不断の要求にジイドは憑かれていると主張している人びとに、あつらえ向きの口実を作ってやっているようなものではないでしょうか。それにまた、いったいこれが議論というものでしょうか。非行の現場を押しえられた中学生も「だって××君もやったんです」と言

うでしょう。誓って申しあげますが、私の言っていることに間違いはありません。男性者の「一群をなしているこれら偉大な人びと」と書かれる際にあなたの感じられた喜びが、あまりにも見えすくのです。実際にあなたが感じられたよりはるかに大きな喜びとして読む者の目に映るとさえ言いましょう。(それに、その人びとが自らの過誤を悔いたという事実によってこそ——ダンテはそういう趣味を嫌悪していたにもかかわらず——彼の寛大さは説明つくのです……)

しかし、私は、文中のあれこれの点について議論しようとは思いません。公開状のなかで、この箇所全文(三頁、四頁)が、ここへ入れるにふさわしくないものと私は思います。それならば、ここをすべて削除し、『コリドン』についても同じことである(第二頁)から「あなたの本に欠如していると思われるのは、ある一章で……」(第五頁)にすぐ移った方がよかったですか……。

然り、とも私には言いきれません。

なぜと言うに、私はこの第五頁があまり好きでないからです……  
ここであなたが提出しておられるものは何でしょう。

小さな職業上の問題にすぎません。そうです、この道徳上の重大な問題を、あなたは突然、文学者のあるひとつの場合にひきもどしておられるのです……。その見解が気の利いた新味のあるものであることは否定しません。しかし、この公開状のなかで、それが突然どんな重要さを帯びてくるか考えてみてください。文士がそこで馬脚を現すことが適当でしょうか。男性の文学者が、自分たちの愛し方を語ることが許されるか許されないかなどということは、一般読

者にしてみれば、いかにも些細な、物事の一面面にすぎますまい。こういうことは、これからもくりかえし、きりもなくあなたの前に提出されてくる問題ではないかと危惧をもつものです。

先を続けましょう。

ついでにいくつかの細部——

——五頁の冒頭——あえてその名を名乗れぬ、それ、それというのは、もちろん、愛のことです。しかし、愛、という言葉がひどく離れたところにあるので、この「それ」は何を指すのか、一瞬とまどいます。

——五頁のなかごろ——次のような章句をどういうふうに整理されるのですか——「慣例への、時として有名な……同意した上での服従」とか「少なからざる者によって、慣例に同意された……」とか。

——五頁のなかごろ——ここではさらにひどくなります。かりにあなたが一行しか訂正してくれないとしたら、それはまさにここにいてほしいものです。「こういう趣味は後天的に獲得される」ことが可能だとは思わないなどと、これほど重々しい調子で断言することとは、まったく常識をはずれた子供じみた所業でありましょう。常軌を逸しています。あなたをやりこめる絶好の種を人に提供してやるようなものです。なんと足を滑らせやすい、危い地盤にあなたは踏みこんでおられることか。しかも、目隠しをして、です。実際

問題として、友よ、当節、百人の男色者のうち九十五人、いやおそらく九十八人までは、男色者になつたものでしょう。そのことはたしかです。既知のものに対する倦怠、好奇心の誘引、性格の奔放さ、梅毒への恐怖などから、ふとしたきっかけで習慣を身につけるようになって、です。持ちまえの本能から、生来的に男色者であるものの数が、それにもかかわらず多いとはいっても、それが後天的に獲得した趣味であるものの数に較べたら微々たるものです。無邪気にあんな発言をしようものなら、まったくそれだけでもう、冷笑者をあちら側に立たせ、あなたに愚弄の雨を降りかからせるのに、同時にまたあなたの主張するすべてのことの権威を損ねるのに十分でしょう。

——五頁の末尾——「倒錯者」というのは、あまり使ってほしくなかつた言葉です。これを使うことで、あなたはまさにこの言葉にふくまれている非難を甘んじて受け入れているようにみえます。もし、満足のいくような無色の言葉、単に「人の心を捉える」「宣べ伝える」「宣伝する」と意味するだけの言葉を見出せないとしたら、せめて、「倒錯者」を括弧のなかに入れるぐらいのことはしていいでしょう。

なおまた、最後の頁について思っていることをぶちまけなければなりません。ここには、はじめに、齒切れ悪く、ポルシェの本が誠実なものであることがくりかえし言われています。ほかに言うこともないから、そう言っているにすぎないことが容易に見えてとれます。

しかもそれは、公開状の最後の二行を導き出さんがためなのです。たしかにこの二行は、公開状のなかで、おそらく最良のところでしょう。記憶され、思索の種とされるに最も値する部分です。しかし、このように《末尾》にもって来るのならば、その前に、「あまつさえ、云々」の張り合いのない、もってまわった、ひどく凝った文章を先行させたのは間違っています。私なら、この最後の二行はぜんぶ書き直すところです。せめて、手際よく結末をつけるのが肝要というものでしょう。

申しあげたいことは言いつくしました。——読みかえしはしません。読みかえしなどしようものなら、おそらくこの乱筆乱文は出さずじまいに終るでしょうから。拙劣であれどうであれ、せめてこの一文、愛情こめた誠意の証しと受けとっていただければ、と思いません。しかし、やはり残念に思っている気持は、あえて隠してしません。

ロジエ・マルタン・デュ・ガール

追伸——〔……〕〔マルタン・デュ・ガールによる削除——原注〕三十一日、一月一日、二日とパリに行きました。ダビを訪ねて行ってみました。彼の魅力はなかなかのもので、彼のことを心にかけてやる価値はあります。ただ友情を示すことで、彼のために尽すというだけであっても。気持に無理をせず彼に好意を示すことができるように思いますし、すでに彼のためにかなりの時間を使いました。あなたに申しあげたかったのは、その訪問が期待外れのものではなかつた、それどころか、彼か

ら友人として遇されて嬉しく思ったということです。

R・M・G

208 ジイドよりマルタン・デュ・ガールへ

二八年一月十一日

親愛なる友

真に友だち甲斐のある助言をいただき、深く感謝しています。私から依頼して、ともかく、公開状は、私がドイツから帰国するまでは「ヌーヴェル」紙に掲載されないことになりそうです。あなたの返事を待とうと思つたのです。電報を受けとつてすぐ、原稿を引き取りました。その際のあなたのいとこさんの態度は申し分なく立派なものでした。親切で、思いやりがあつて……。別にまた彼から受けとつた手紙をここに同封します（これは保存しておいてくださるよう）。けさになつてようやくお手紙が届きました。まさに、あなたの言われるとおりなのかもしれません。ご承知のとおり、私も、相手があなただとなんの抵抗もなく説得されてしまいます。モリスから手紙を受けとつたとき、彼に電話して、私としては全面的に彼の意見に従うつもりであること、そのように私に語りかけてくれ、いかにも温かく私に対する理解を示してくれることに感謝していること、どんなに深い信頼をもつて彼のところへ稿を寄せたものであるか、などを伝えておきました。原稿のコピーは彼ももつてい

ますが、私に不利になるような形で使うことは考えられません。要するに、私のとつた行動を後悔しなければならぬとは思っていません。もちろん、そのまますぐ発表してもらわなかったことはよかつたと思つていますが。

あなたに長い手紙を書くために、もう少し時間の余裕のないのがたいへん残念です。日曜日にはベルリンへ発ちます。それまでにしなければならぬことが山ほどあるのです。それにものすごい偏頭痛。あなたはほんとうに友達甲斐のあることをしてくれました——ダビに会いに行つてくださったそうで、どうもありがとうございます。ベルリンから帰つたら、私も彼とお喋りしに行きます。〔……〕〔マルタン・デュ・ガールに  
よる削除  
—原注—

大特許会社についての驚くべき記事が出た後、ヴィクトール・パツシユ（ソルボンヌの美学教授。彼は人権同盟の総裁だった—原注）を訪問したときのことをあなたに話したかったのですが。この事件にはほんとうに困りました。なにせ相手はこわいもの知らずの無頼漢なのですから。しかし私は戦います。さようなら。頭痛がひどくてこれ以上書いていられないのです。以前にもましてあなたの

A・G

209 ジイドよりマルタン・デュ・ガールへ

パリ、一九二八年二月三日

## 親愛なる友

ベルリンから帰って来ました。あちらではマルクと二人、ひどく身体にきつい、しかしひじょうに面白く、あらゆる点で有益な——とは言っても、財政的見地からすれば別ですが——二週間を過しました。昔からの友人や新しい友人の好意あるもてなしにつかまえられていたので、仕事にはほんのわずかの時間しか割けず、したがってはじめに予定していた講演は断念せざるをえなくなりました。その代りに座談会をやったわけです。おびただし数の人びとと握手し、また多数の人物と笑顔の挨拶を交したものです。なかのいく人かは、あなたもきつと大いに興味を唆られたであろうような人物です。あなたも「ベルリンに行かなくてはいけない」とマルクが言っています。私は、彼ほどにそう思ってもいけないけれど、もしあなたが行かれるようなら、そのときはどうかわれわれといっしょにということに願いたいものです。われわれの楽しみのためにも、あなたの楽しみのためにも。われわれはあなたに町の裏側を見せてもあげられるだろうし、むだな模索の手間を大いにはぶいてもあげられるだろうと思うのです。パリへ出るときには、どうかその旨知らせてください。会えば、話すこともたくさんあるでしょうから。二週間したら、われわれは《商談》のために、またベルリンへ呼ばれるかもしれません。ある映画のことで、はじめいく人かの《映画人》のお偉方に断られていたのが、あとで愛好家たちのあいだに大好評を博したので、またぞろ希望をとりもどしているのです。

帰って来て、少し疲れてはいるものの、新しい印象や考えで頭がいっぱいです。コペにも手紙を書きました。フォール・ラミに宛て

て出すのですが、たぶんまだそちらにいるうちに届くでしょうね。

『チボー家の人びと』はどうなっています？ お宅の皆さんはどうしておられます？ クリスチャーヌはいっ掃って来るのでしょうか。ときれた音信を回復するために、とり急ぎ一筆認めた次第です。友情をこめて、あなたの

アンドレ・ジイド

『フランク・ポルシェ』  
「F・Pへの公開状」の「ヌーヴェル・リテレル」紙への発表を思い止まらせようとしてくださったこと、まったくあなたの考えは正しかったと思います。あのように率直に言ってくくださったことに對し、どんなにか感謝しています……。

210 マルタン・デュ・ガールよりジイドへ

ベレーム、二八年二月八日

親愛なる友。あなたに返事をするために顔をあげます。ということとはすっかり仕事にかかりきっているということです。「N・R・F」と二、三の質問好きの友人たちに対し、ばかなことに私はいくつかの約束をしまいました。それを守らないことには恥ずかしくて顔もあげられない、というわけで、仕事の上身をかがめているのです。それにいま、私はあの《弾みのついた力》が、どんなに大きな効用をもつものかを身に沁みて感じています。これはベキニシエ



用の言葉〔紋切り型〕ではありません……。ほんとうにそういう力は存在します。四、五週間にわたる中断のない仕事の後、いま、何がどうなっているか申しあげることではできませんが、ただとてつもなく速く、いや増す自信と熱意——一種加速され、また自ら加速しつづある力をもって仕事にうちこんでいます。これはきわめて「得になる有利な」ことです。そこで、現在、私は死人をよそおい、地中に潜んだままだれにも会ひまい、パリへも行くまい、このありがたい魔法を解く恐れのある身ぶりなどひとつでもすまいとしているのです。もちろん、こういう水も洩らさぬ完璧な、外部との絶縁状態が、ずつと持続するものとは思いません。しかし、予測せぬ不可避の出来事でも起つてこの空気を破裂でもさせないかぎり、私は耳を垂れ、尾を垂れ、顔をわが《魔法の書》の上にさらして、わが空無の世界にとどまるつもりでいます。

さてこれで、ご無沙汰の理由、私がパリへ、ましてベルリンへなど行きたがらない理由がわかつていただけれるものと思います。来年の冬にしましょう。約束します。行きたいとはずつと以前から思っているのです。《予測せざる出来事》の大好きなあなたといっしょに旅行することには、甚だ恐怖を覚えるものですが、緩衝地帯としてマルクが存在するならば、まあ、危険を冒してみましよう——よしんば仲違いでも（それは長くは続かないことでしょうから）——そして、あなたがたといっしょにでかけます。

ともあれ、アフリカの《地方総督》〔マルセル・ド・ゴベール原注〕からたいへんいい便りがありました。またすつかり元気になったそうです。アントネットイ周辺の噂によれば（アントネットイ付秘書官で、エレーヌ

の友人ベニランからの手紙）、今度チャドへもどると知事になる公算が大きいということ。

変らぬ愛情をあなたに対して抱いています。一人ぼっちの生活も、友人を忘れさせてはくれず、むしろその逆で、ものを書くときには必ずあなたのことを思い浮べているのです……。あなたの言いそるな意見に賛成したり、反発したりしながら。

心こめて、あなたとマルクを抱擁します。

R・M・G

211 マルタン・デュ・ガールよりジイドへ

テルトル、二八年二月九日

親愛なる友

コペの姉妹たちからたいへん悲しい手紙が届きました。植民地省において七人の知事が任命されましたが、そのうちの一人、デート氏が、チャド地方知事だそうです。（この人物は、マルセルと同階級、同期の主任行政官でした。）

マルセルはチャドから追ん出されるわけです。やりかけた事業を他人の手に残さなければならなくなるでしょう。とすれば、あちらへもどったところで何にもならぬということ。またしてもアントネットイには、からだののだと思えます——彼はマルセルを操るにどこを叩けばいいか知りぬいています。以前、彼の帰りを待